



#07

おねだりふんごう...

著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽



ピンポーン。

「おーい、結花、早くしろよー。学校遅れちまうぞー」

俺はいつものように鷺沼家の呼び鈴を鳴らす。寝坊の結花を俺が迎えに行くのは中学の時か
らずとだから、もう4年目になる。

ピンポーン。

「おーい、まだ寝てんじゃねーだろうなー」

つたく高校に入ったたら、ちつとは生活態度改まるかと思つたら全然だな。もう今日はさき
行つちまおうか。

ピンポ「きやーーーーー!!!!!!」

「な、なんだ!？」

……悲鳴、だよな、今の？ しかも結花の声つばかったような……。

つかの間の静寂が続いて、今度は家全体が揺れるようなドドドドドという音が鳴り響き、
勢いよく玄関のドアが開け放たれ、結花が飛び出してきた。

しかも2人。……2人？

「京介、どうしよう！ あたし増えちゃった!？」

2人の結花は本当に困った顔をして絶るような目で俺を見つめていた。

「ごめん、もっかい説明してくれる？」

「だからー、朝起きたら増えてたんだってばー、この子がー」

「ちがうよー、増えたのはこの子だよ！ あたしが本物の結花だって、京介ならわかるで
しょ?」

ダブル結花がお互いを指さして俺に訴える。……意味がわからねえ。

顔は瓜二つだし、しゃべり方も仕草も、2人とも完璧におんなじだ。幼なじみ歴15年の俺で
もまったく見分けがつかないレベル。まるで鏡に映したようにそっくりだ。

どちらとも自分が本物だと言って譲らない。挙句の果てに、一人は冬服、もう一人は夏服で一
緒に登校してきやがった。

どっちがどっちを着るか、じゃんけんで決めようとしたが、あいこばかりでまったく勝負が
つかないので最終的にあみだくじで決めたそうだ。心底どうでもいい情報だ。

まあ、今は衣替えの移行期間なのでそれは問題ないのだが……っていうか、結花が増えて
るって事自体が大問題なわけだが！

ちなみに結花のおばさんは「あらー、可愛い結花が2人に増えるなんてお母さん嬉しいわー
幸せ2倍だわー」ってむしろ喜んでました。……いや、おばさん包容力ありすぎでしょ。

「ねえねえ、京介。京介ならわかるでしょ、どっちがあたしかって」

「なに厚かましいこと言ってるの！ このニセモノ！ あたしの方が本物に決まってるでしょ、

ねえ京介!」

「あたしが本物だよねー、ねー、京介ってばー」

「ねーねーねー、ねーってばー、あたしの方だよねー、ねー、ねーってばー」
うん。

このうざい感じはどっちも結花で間違いない。

しかもダブルで来ると単純に2倍じゃなくて10倍にも20倍にもうざく感じるのな。初めて知った。知りたくもなかったけど。

「もうこんなやつほっといて先に行こー」

夏服結花が俺の腕にしがみついて強引に引っ張っていきこうとする。

ぐい。ぎゅー。

ぐい。ぎゅー。ぎゅー。

「お、おい、離れろよ、当たってんぞ……おいてー!」

「え? なになに? なにが当たってるの? な・に・が・当・たっ・て・いるのかなー!」

こいつ明らかに判って胸押しつけてきてんだろ! お前のまっ平らな胸なんか全然……って結構あるじゃねえかおい、いつの間に成長したんだ、こいつ。

……これはもしかして80ぐらいあるのか? Cカップってやつか……? いや、よく知らねえけど。び、微妙に気持ちいいじゃねえか、このやろう……。

じーーーーー

背後から強烈な視線を感じたので振り向いてみると、冬服結花がこれでもかというジト目で俺を睨んでいる。

な、なんだよ、俺は別に何にもしてねえじゃん! 夏服結花が勝手にはしゃいでるだけだろ!

「いやらしい……!」

「何よ。うらやましかったらあんたもやればいいじゃない?」

「あたしは……! そんなうらやましくなんか……ないもん……!」

夏結花が挑発するようにそう言くと、冬結花はうつむいて黙ってしまった。

「じゃ、あたし達の邪魔しないでくれる?」

「! ……知らない! あたしもう先行ってるから!」

「あ、おい、ちょっと待てよ!」

俺の制止も聞かず、冬結花はそのまま学校の方に走り去ってしまった。

「あーっはっはっはっ! いい気味だわ! ニセモノのくせにあたしの京介をとろうとするから、そうやって尻尾まいて逃げるハメになるのよ!」

夏結花が勝ち誇ったかのような高笑いをあげる。目に宿るのは明らかにSの気色。
 ……あれ、こいつ、こんな性格だったっけ……？

「ふーん。改めてみるとこれはまた変わったエロゲーですわね。さしずめ『ドキッ！ おさなじみで両手に花、塗れ手に粟でおっぱいおっぱい！』ってとこでしようか」
 昼休み。

前の席から振り返った橘薫子が見てそう言った。

俺はがつくりと肩を落とす。

冬花（もう面倒だから冬花、夏花と呼ぶことにした）はいつもの結花の席についているのだが、夏花は机がない、というところで俺の隣にわざわざ席を持ってきてびったりと密着している。昼休みになる今まで、俺がトイレに行ったとき以外は片時も離れやしねえ。

ちなみに「結花が増えた！」という話題は2時間目にピークを迎えたあと、徐々に収束の気配を見せ、昼休みの今はクラス中、腫れ物を触るようこちらを伺っているだけ、という状況だ。超いたたまれねえ。

「橘、お前の目にはこれが『両手に花』に見えるのか？ お前のメガネの奥にあるふたつのそれはふし穴か？」

「あら、愛しい人が2人になったんだから幸せも2倍でしょう？ 何か問題あるのかしら？」

「結花のおばさんみたいな事言ってるじゃねーよ！ てか誰が『愛しい人』だよ!？」

「あら違うの？ あたしはずっとそういう認識で見てたけど？」

「ちげーよ！」

「違わなくないよ！ ねー、ダーリン♥」

「暑苦しい！ 離れるよ、お前！」

猫のようにすり寄ってくる夏花を強引に引きはがす。

「んもう、そんなに照れなくていいじゃない。はい、一緒にお弁当食べよう」

「え？」

いつの間にか目の前に見事なお重が展開されている。唐揚げに玉子焼きにおいなりさんにウサギりんごにタコさんウィンナーに……まるで花見か運動会かという充実っぷりだ。

「これ、お前が作ったのか？」

「そっだよ〜♥」

「あんなに朝どたばたしてたのによく弁当なんか作る暇あったな……しかもこれだけの量……」

「うふふ、愛さへあれば2人はどんな障壁も乗り越えられるんだよつ★」

2人ってなんだよ！ ……っていうか、夏花またキヤラ変わってねえか？

「さささっ、いいから食べよ食べよ！ 美味しいよ！」

じーーーーー

隣から強烈な視線を感じたのでちらりと視線をやると、やっぱり冬花がこれでもかというジト目で俺を睨んでいる。

「何よ、一個もあげないからね！ 仕切りのバラン1枚ですらあんたには惜しいわ！」

「誰も欲しいなんて言っていないでしょ！」

「だったらいつも通りさっさと学食行ったら？ あたし達の邪魔しないでくれる？」

「ぐぬぬ……」

俺を挟んで夏花と冬花が火花を散らして睨み合っている。

たぶん世界で一番いやなシンメトリーだ。

「ほら、京介、早く学食行こ！ A定売り切れちゃうよ！」

冬花が俺の腕をとって強引に連れていこうとする。

「ちょっと、その手離さないよ！」

夏花もすかさず反対の腕をとって引つ張る。

ああ、これあれだ。

三角関係ラブコメなんかでよく見る大岡裁おおおかざりき状態だ。まさか自分が体験する羽目になるとは

思つてもみなかつたぜ。

俺を心配して先に手を放した方が真の恋人……って展開はなさそうだな。2人ともマジ睨み合つてんもんな。

「いい加減に放しなさい！ 京介はここであたしの『愛妻弁当』を食べることに決まつてるんだから！」

「愛さ……!?!? なんですつって!?!」

「愛・妻・弁・当よ。京介のために愛を込めて作つたんだから当然そうなるわ！」

「ふん！ 京介はどうするの!?! こんな奴のお弁当なんか食べないよね!?! いつも通りあたしと学食行くよね!?!」

「あ……う……」

夏花と冬花の強力な視線の矢に刺されまくって俺は言葉に詰まる。

張りつめた静寂の中で、1秒が1分にも10分にも感じられる。

なんですか、これ……針のむしろつてやつですか……?!

「うーん……まあ、せっかく作ってくれたんだし、悪いから今日は弁当の方もらうわ」

冬花が息を呑んだまま硬直する。

夏花が勝ち誇つたような微笑を浮かべる。

さすがにあれだったかな……。でも他にどうしろって言うんだよ。

「そうだ、結花、お前も一緒に食べれば」
「知らない！」

俺が言い終わらないうちに冬花は脱兎の如く、教室から走り去ってしまった。あちゃー。
「さすがに最後の一言はデリカシーがなかったんじゃないかしら、京介くん？」
「う、うるせえ……」

橘のツツコミに弱気で反論しつつも、納得せざるを得ない。
なんだよ、この無理ゲー、どこが真ルートだよ……。

「さささっ、はい、京介あーん♪」

「や、やめろよ、一人で食えるって」

唐揚げをお箸で摘んで差し出す夏花はめっちゃめっちゃ幸せそう。くそ、人の気も知らねえで……。ちっちゃつと食べて早く冬花のフォローに……ん？

「美味い……」

「でしょー！ 結花、超頑張ったんだから」

その辺のファミレスで食うよりも断然美味い唐揚げだった。他の玉子焼きも、フライも、おひたしでさえも、めっちゃめっちゃ美味い。気がつけば俺は夢中がつついていた。
が。

「おい、結花、お前……」

「ん？ なあーに、京介くん♥」

「お前……左利きだったっけ？」

幸せそうな笑みを浮かべていた夏花の表情が一瞬凍り、箸を持っていた左手をあわてて背中
の後ろに隠す。そしてすぐにどこか寂しげな色が瞳に浮かんだ。

「そっか、気づいちゃったんだ」

「結花、お前……!？」

目の前の夏花に異変が起きた。
透けている。

夏花の向こうの景色が、まるで彼女という摺りガラスを通してぼんやり透けて見えるよう
な……。

これは……夏花が消え始めている!？」

「ごめん、あたし不器用だから上手くできなかつたかも、だけど……」

「おい……」

「あたしが消えても忘れないでね。夏花の想いは冬花の想いでもあるってこと。結花の気持ち、
判ってあげてね……」

「おい、夏花!？」

俺が差し出した手はただ空虚をつかんだだけだった。

夏花は空気に溶けるように、完全に消えてしまった。

「うーん、そうか、見破られると消えちゃうのか。あたしの術式もまだまだね」

「啞然とする俺の耳朶を、薫子の不可解な台詞が打った。

「お前……何か知ってるのか？」

「ふふふ、あたしはちよつと『恋を応援する魔法』を結花にかけてあげただけよ。」

「どういうことだよ!？」

「好きな人の前で素直になれない、好きなのに好きといえない……そんな自分じゃなくて、もつと好きってストレートに言える自分になれるようにって」

「それが、夏花だったってことか？」

「本当は結花自身がそうなるはずだったんだけど、きつと朝、鏡を見たときに魔法の効果が出ってしまったのね。『鏡の向こうの自分』に対して」

「だから左右反転してたってわけか……。でももしそれが本当なら結花は俺のこと……。」

「ちよつと行ってくる!」

俺は夢中で駆けだした。

早く、早く結花を捜さないと!

「はあ〜うらやましいわ〜、青春だわ〜」

俺の後ろで溜め息混じりの橋の声が聞こえたような気がした。

「あたしだめだ、本当にだめだ……」

旧校舎裏にある手洗い場に一人佇んだあたしは、心底そう思った。

蛇口をひねって、流れ出す水に頭を突っ込む。

涙でぐちゃぐちゃの顔を誰にも見られなくなかったから。

特に、京介には。

「あたしがこんなんだから、あんなニセモノに、あんな簡単に京介をとられちゃうんだ……」

顔をあげたがしよ濡れのあたしは、鏡の向こうで泣き笑いのような表情を浮かべていた。

これは誰？

あたしこんな顔してないよ??

「あたしが……もつともつと綺麗で……もつともつと魅力的で……そうだ、京介が好きなRKBのセンターの娘ぐらい素敵だったら……」

「やめろ、結花! それ以上願うな!」

「え? 京介?」

昇降口から走ってくる京介の姿を確認した瞬間、目の前の鏡から眩いばかりの光条がほとばしった。

「なに、これ……」

そして鏡の中から極彩色にいろどられたドレスを着た「あたし」が飛び出してくる。手にはマイクを持ち、バックには何故かダンサーを従えて……。

「やっほー！ アイドルの結花爆誕だよー！ 今日京介くんのためだけに歌いまあーす！」
どこからか放たれた七色の光がアイドル結花を照らし、大音量のビートに乗せて彼女は歌いだした。

恥ずかしくなるほどストレートなラブソングだった。

京介と結花の穏やかな日常が戻ってくるのは、まだちょっと先の話になりそうだ。

おしまい